

第3章 浜松市の歴史文化の特徴

本市の歴史文化の特徴について、地質や文化圏、自然環境が織りなす地域特性、交通、気風などの諸特性とともに、注目すべき文化財の特徴を取り上げ、以下に示す12項目に整理する。

1 日本列島を二分する地質	7 基層信仰と多様な民俗芸能
2 東西文化圏の交錯地	8 地域の成り立ちを伝える遺跡群
3 浜名湖と天竜川が織りなすサト、ヤマ、マチ	9 徳川家康と武田信玄が対峙した攻防の舞台
4 東海道と姫街道がもたらす往来のにぎわい	10 古刹と寺宝
5 秋葉街道を通じた交流と信仰	11 豊富な名勝庭園
6 ものづくりに関わる新進の気風	12 都市「浜松」の成り立ちとゆくえ

1 日本列島を二分する地質

本市は、日本列島のほぼ中央に位置し、列島最大の断層・中央構造線に沿い、またフォッサマグナの西側において、2つの断層帯に挟まれた三角地帯にあたる。本市域の大半は中央構造線よりも東（南）で、三波川帯等を含む西南日本の外帯にあたるが、天竜区水窪町や佐久間町の一部は中央構造線の西（北）で内帯にあたる。内帯の特徴的な岩石に領家帯があるが、これは水窪町の奥領家という地名がその命名のもとになっている。県境の青崩峠（天竜区、県史跡）から翁川の直線的な谷を經由する構造線は、水窪川との合流地点付近から山地に入りホウジ峠（天竜区）から佐久間町浦川方面へと次第に西向きに方向を変える。

本市を含む三角地帯は、複数のプレートがぶつかり合う境界に近く、二つの大きな断層以外にも隆起と褶曲により複雑な地形が造られ、断層に沿った深い溪谷が直線的に続き、破碎帯が崩落しやすい露頭を呈している。さらにプレートの衝突による歪みを解消しようとする断層（赤石裂線と光明裂線など）が複雑に錯綜している。このため、二俣川では川の両岸で岩石が異なるなどの景観を形成している。シブカワツツジ（県天然記念物）やギフチョウ（市天然記念物）など特徴的な動植物がみられる蛇紋岩地帯も三角地帯の中に含まれる。

市域の外帯を構成する岩石の多くはもともと海底であったが、フィリピン海プレートの潜り込みによって押し上げられた付加帯にあたる。帯状に分布する石灰岩からアンモナイトをはじめとする貝化石などが産出するのはこのためである。陸化した石灰岩は浸食によって鍾乳洞など独特の景観を造り出している。数万年前にこの地に進出した人類は、鍾乳洞や岩陰を利用しており、その痕跡が見つかっている。日本列島の土壌の多くは土中に古い化石などを長く留めないが、石灰岩はその性質によって人骨や獣骨が長く保存されるため、本州最古の化石人骨とされる浜北人（下層約18,000年前、上層約14,000年前）やそれに次ぐ時代の三ヶ日人（約8,000年前、出土は只木遺跡）など、他の地層では見つかりにくい化石人骨が発見されているのも地域の特色である。



図3-1 只木遺跡

2 東西文化圏の交錯地

浜松市は、首都圏と関西圏の中間地点にあり、日本列島を二分する東日本的要素と西日本的要素が交錯する地域である。遺跡や出土品等に現れる諸特徴のほか、食文化や方言など、現代の生活文化にも両者が入り混じる様相が見出せる。

本市は、国内有数の銅鐸密集地として知られている。銅鐸は弥生時代の祀りに用いられた大型の青銅器であり、これまでに完形の銅鐸^{どうたく}19口の出土が知られている。これらは、すべて弥生時代後期（約2,000～1,900年前）の製作品に限定できる点でも、その集中度は際立っている。弥生時代の日本列島には、銅鐸や銅剣、銅矛といった大型青銅祭器を用いる西日本文化圏と、基本的に大型青銅祭器を用いない東日本文化圏という二大文化圏があったことが知られているが、本市はこのうち、西日本文化圏の東端部に位置している。

食文化では、本市は東西の様相が混在する。一例として、当地の名物、うなぎを取りあげる。当地でうなぎが特産化するのには明治時代以降のことであり、東京と大阪という二大消費地の中間に位置する本市は、大都市への供給に優位であった。このため本市では、「関東風」、「関西風」と呼ばれる異なる焼き方の双方がみられる。関東風では、うなぎを背開きにし、白焼きにした後、蒸してから再びタレをつけながら焼き上げる。一方、関西風では、うなぎを腹開きにし、直火で白焼きにしたものを蒸さずにタレを付けて一気に焼き上げる。

方言についても類似した特徴が指摘できる。浜松市では、東京系アクセントを持ちながら、独特の言い回しやイントネーションがみられる「遠州弁」^{えんしゅうべん}が用いられているが、細かな表現に注目すると東西の様相が混在している。明治36年（1903年）の国語調査委員会の調査による方言東西境界線からは、遠江中心に東西の表現が入り乱れている様相がうかがえる。



図3-2 東西文化の交錯 (1:銅鐸の分布、2:前原銅鐸、3:滝峰才四郎谷銅鐸、4:うなぎ蒲焼、5:方言の分布)

3 浜名湖と天竜川が織りなすサト、ヤマ、マチ

本市の代表的な水域である浜名湖と天竜川は、平野部（サトの空間）と山間部（ヤマの空間）に入り込み、人々の往来に用いられた。また、市域の各所には、街道などの結節点を中心に人々が集まるマチが点在し、地域拠点が分散する状況も見いだせる。

浜名湖の湖岸線は複雑に入り組み、潮汐によって水位が大きく変動する。浜名湖では海苔やうなぎといった養殖業が営まれるとともに、湖の北側ではみかんの栽培が盛んである。湖をめぐる風景は、『万葉集』におさめられた作品にみるように、古くから歌に詠まれ親しまれてきた。

天竜川は長野県の諏訪湖を水源に、遠州灘に注ぐ大河川である。市域では、北部の天竜区域において山間地を縫うように流れ、二俣地域を境に平野が広がる下流域に至る。山間部の流域はスギやヒノキ等の森林資源が豊富であるほか、近代には鉱山や製紙工場も発達した。上流部と下流部は昭和28年（1953年）に佐久間ダムが建設されるまで（完成は1956年）、舟運で結ばれていた。平野部では近世から綿栽培が盛んになり、織物業の隆盛から、やがて工業都市へと発達する。

人々が集住するマチは、それぞれその成立基盤が異なる。なかでも中世都市「引間」と異なる位置に出現した城下町「浜松」は、都市化が顕著に進み、現在は中心市街地を形成している。また、戦国時代の城下町である二俣地域は、地理的にヤマとサトが重なる位置にあり、中近世には天竜川舟運の拠点が置かれたり、近代には繭流通の拠点が形成されたりするなど、伝統的にヤマとサトをつなぐゲートウェイ（結節点）としての役割を担っている。



図3-3 浜名湖・天竜川関連図（1:浜名湖、2:マチの風景、3:ヤマの風景、4:天竜川、5:地域の詳細）

4 東海道と姫街道がもたらす往来のにぎわい

関西と関東の中間に位置する浜松では、古くから、物資、情報が行き交い、古代から現代に至るまで、街道、鉄道、高速道路が次々に設けられた。これら列島の東西を結ぶ大動脈は、浜名湖の南岸ルートと北岸ルートに分かれていた。古代における両者の分岐点は、西の三河国府（愛知県豊川市）と東の遠江国府（磐田市）である。2つの分岐点を結ぶ距離には両者で大きな違いはなく、自然災害などの要因を背景に主要経路が移り変わった。

浜名湖南岸ルートは、古代から近世に至る東海道の経路である。国道1号、東海道本線、東海道新幹線なども並行する。古代の駅路もこの経路を採っていたとみられ、猪鼻駅や栗原駅といった駅家が設けられた。古代の敷智郡家も古代東海道に近接し、当地域の中心は中世都市「引間」から近世城下町「浜松」に受け継がれた。東西を結ぶ往来のにぎわいは、多くの交流人口を呼び込み、近代以降、都市が発展する礎となった。また、近世には、浜名湖を挟んで舞坂宿と新居宿（新居関所）が置かれたほか、浜名湖と天竜川は舟運で結ばれていた。

一方、浜名湖北岸ルートは、「姫街道」の名で知られる。この経路は、古代には二見道、近世には本坂通と呼ばれた。細江町気賀に想定される引佐郡家は古代北岸ルートの中心地であり、近世には気賀関所が設けられた。この他、姫街道の宿場としては、市野と三ヶ日がある。また、近現代、北岸ルートには、国鉄二俣線（現天竜浜名湖鉄道）や東名高速道路、新東名高速道路ができた。

浜名湖を挟む南北地域は、東西交流の舞台として栄える一方、江戸時代の領主がそれぞれ異なるなど、独自性も多く見出せる。両地域は、現在においても、舞阪町、雄踏町といった表浜名湖地域と三ヶ日町、細江町、引佐町といった奥浜名湖地域に受け継がれ、文化財の宝庫として知られている。



図3-4 上段：東海道風景（1：今切渡し舞坂渡船場、2：旧舞坂脇本陣 3：東海道の松並木）
下段：姫街道風景（4：本坂峠、5：本坂一里塚、6：岩根薬師堂）

5 秋葉街道を通じた交流と信仰

秋葉街道（秋葉道）とは、秋葉山の参詣を中核として発展した遠江と奥三河、南信州を結ぶ交通路の総称である。この街道を通じた交流と信仰の足あとは、市域の歴史文化に色濃く影響を与えている。市域を貫く南北交流路は、「信州街道」、「塩の道」の名でも知られている。いずれも正式な道筋として定まっておらず、複数の経路がある。南北交流路としての秋葉街道の役割は、古くから重視されてきた。5世紀中頃に築かれた光明山古墳（天竜区、国史跡）は、秋葉街道を見下ろす立地にある。古代以降も信州と遠州の往来は盛んであり、元亀3年（1570年）、武田信玄が進めた遠江侵攻（別動隊）にも、秋葉街道が利用された。

秋葉街道の中心である秋葉山は、標高866mの山頂付近に築かれた山岳宗教の霊場である。近世には、聖観音を本尊とする秋葉寺と秋葉大権現をまつる秋葉社が併存し、修験者三尺坊が護神とされていた。秋葉大権現の利益は、武運長久が第一とされ、戦国武将達が奉納した刀剣（国重文）が伝わる。江戸時代後期以降は、火伏の効力に注目が集まり、広く民衆の信仰を集めた。江戸から秋葉山に至る参拝者は、東海道掛川宿から森町を経て秋葉山に至り、熊（天竜区）から鳳来寺（愛知県新城市）を経由して東海道御油宿（愛知県豊川市）に至る経路（三河では鳳来寺道とも呼ばれる）をとった。秋葉山に続く道沿いや集落の中には秋葉灯籠が建てられ、集落ごとに祭祀が継続されている。秋葉灯籠には、精緻な彫刻が施された鞘堂（龍燈）を伴うことも多い。

秋葉街道が貫く北遠地域は隣接する奥三河や南信州との歴史文化の共通性が高い。山里に関わる生活習慣をはじめ、正月行事の田楽、猿楽、田遊といった中世芸能を演目に持つ祭礼をはじめ、霜月行事の湯立て神楽（花祭）や盆行事の念仏踊りといった民俗芸能が広域に認められる。

北遠地域には、山住神社や春埜山といったヤマイヌ（オオカミ）信仰の中心地もある。鹿や猪といった害獣や動物にまつわる災いを遠ざけるとされたヤマイヌへの信仰は、焼畑農耕が行われた山間地で特に盛んである。信濃駒ヶ根のヤマイヌ、早太郎（しっぺい太郎）は、遠江の見付（磐田市）に出向き悪霊を退治するが、信州への帰路に命を落とすという伝説がある。その墓は複数知られているが、青崩峠（天竜区、県史跡）手前の秋葉街道沿いにも、早太郎の墓といわれる祠がある。秋葉街道を通じた南北交流の痕跡といえるだろう。

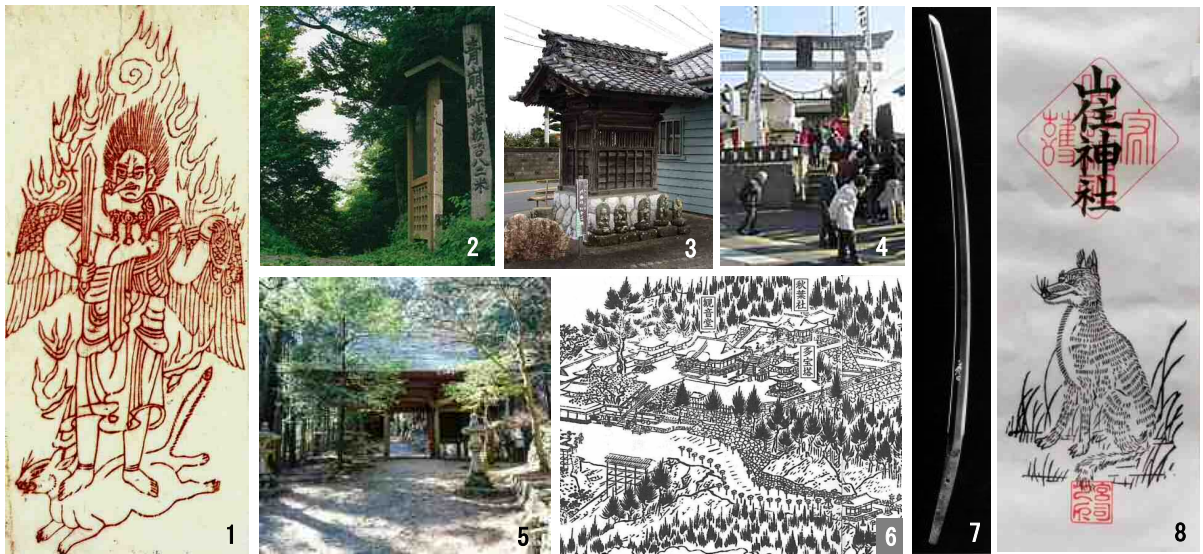


図3-5 秋葉街道関連文化財（1:秋葉大権現札、2:青崩峠、3:秋葉山常夜灯鞘堂、4:小松秋葉大鳥居、5:秋葉神社神門、6:近世の秋葉山、7:秋葉社奉納刀、8:山住神社札）

6 ものづくりに関わる新進の気風

古くから多くの交流人口を抱えた当地では、ものづくりに関わる新進の気風が育まれてきた。当地では、郷ヶ平6号墳出土品にみるように、近畿地方から発信される古墳文化の情報と硬質焼成陶器である須恵器を造る技術を融合させ、独特の技法をもつ埴輪がつくられた。また、平安時代、吉名窯（浜北区宮口）などで生産された灰釉陶器は、高級品である緑釉陶器を基に技術革新を経た量産型陶器であった。さらに、戦国時代に操業された初山窯（北区細江町中川）も当時では最新技術をもった施釉陶器が生産された。これらの焼物は、いずれも尾張地域での焼成技術と共通性がある。

江戸時代中期以降、綿花生産が進んだ天竜川平野で織物産業が盛んになり、綿織物産の主要な生産地として発展を遂げていった。織機製作で培われた技術は、楽器や輸送機器の製作にも応用され、その後の工業都市「浜松」の発展を支えた。また、明治初期には県政の中心が静岡に統合され、政治的な繋がりが希薄になったことも関連し、当地では自由啓発を促す新進の気風の醸成が進んだ。近現代における当地での工業の隆盛には、こうした気風に押され、革新をもたらした多くの技術者・企業人が関わっている。近年は、光電変換技術を用いた製品開発や光技術の医学への応用といった光産業の隆盛も注目を集めている。活気のある経済界が主導するは現代まで引き継がれ、浜松は「ものづくりのまち」として、多くの世界企業を擁するようになっていく。

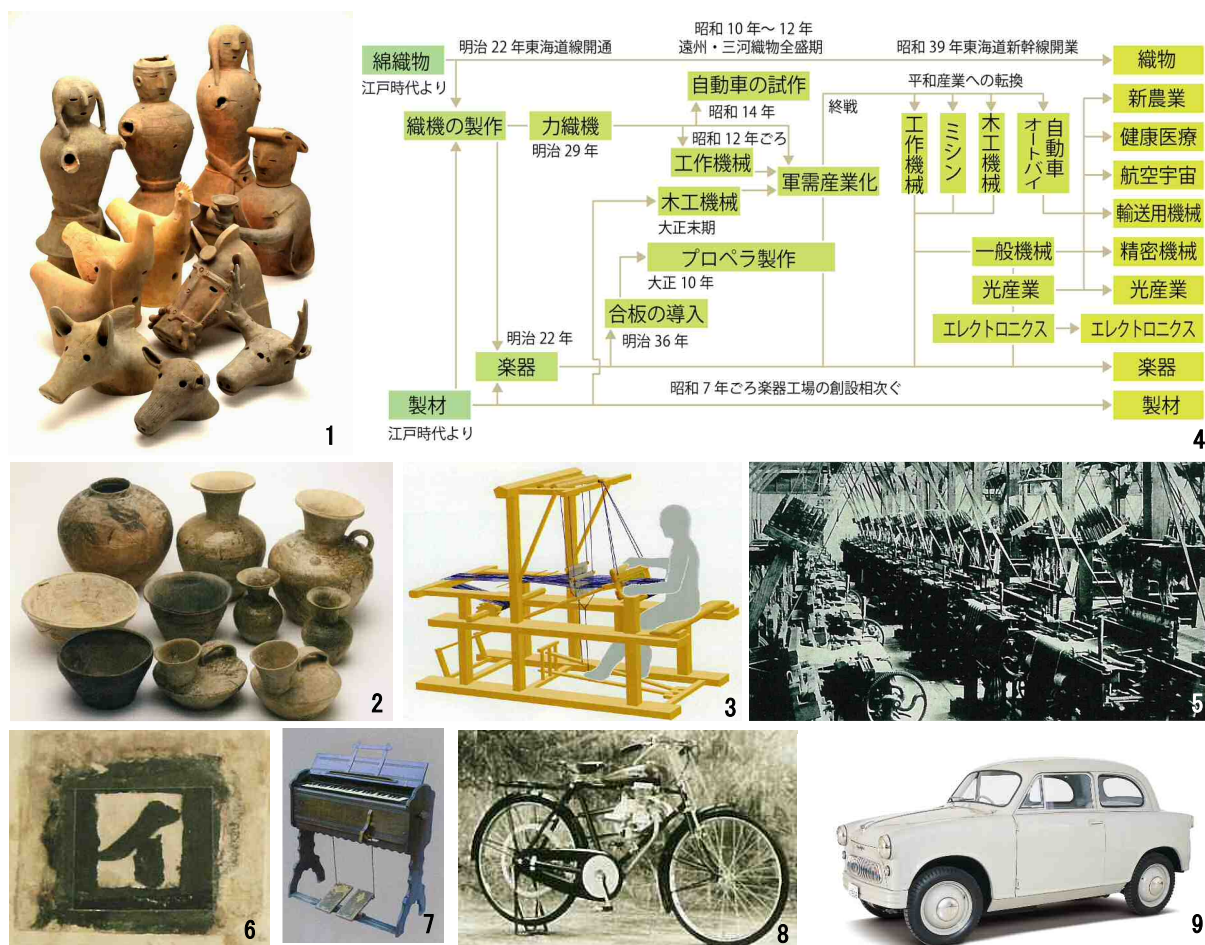


図3-6 ものづくりに関係する文化財 (1:郷ヶ平6号墳出土埴輪、2:吉名窯跡出土灰釉陶器、3:遠州機見取図、4:工業生産の系譜 5:市内所在織布工場の絵葉書、6:日本で初めてテレビ画面に映された文字の雲母板、7:国産オルガン、8:エンジン付き自転車、9:日本初の軽自動車)

7 基層信仰と多様な民俗芸能

古代の人々の心に宿るカミやケガレに対する恐れや、豊饒を願うような基層信仰は、祭祀に関わる遺跡や出土品、民俗儀礼などにその系譜をたどることができる。本市では、涓伊神社境内遺跡(天白磐座遺跡、北区、県史跡)を代表例に祭祀遺跡や関連する出土品が多く、古代人の精神生活をうかがうことができる。鳥居松遺跡(中区)出土の弥生時代の家形土器(市有形)は、浜名惣社神明宮本殿(北区、国重文)に代表されるような神明造に通じる神殿の姿を示す。また、辺田平1号墳(浜北区)出土埴輪が示す狩猟の情景は、現代に伝わるシシウチ神事とも共通する。

本市には、数多くの無形民俗文化財が知られている。元旦から1月中旬(旧暦を含む)にかけて行われる田楽、田遊系の芸能は、中世芸能の様相を色濃く残す。西浦の田楽(天竜区、国無形民俗)や遠江のひよんどりとおくない(北区及び天竜区、国無形民俗)が広く知られており、五穀豊穡を祈った予祝儀礼や、寺院行事である修正会などが組み合っている。

大念仏や放下などと呼ばれる盆行事は、戦国時代から江戸時代にかけて宗教色を帯びた念仏踊りとして発達した。滝沢の放歌踊り(北区、県無形民俗)は、愛知県新城市から伝わったとされ、三遠国境を跨ぐ交流を物語る。また、7月、8月には、同じく中世起源とされる遠州大念仏(市無形民俗)も、市内各地の祭事として広く行われている。

霜月祭りや花祭などと呼ばれる行事は、11月に行われる湯立て神楽を中心とした催事である。冬枯れの季節である11月に清めの湯立てを行うことで、新たな生命力を呼び起こすことを目的としている。この祭礼は、奥三河を中心に発達し、鬼面をつけた舞が加わることも特徴的である。本市では、川合花の舞(天竜区、県無形民俗)を代表例に、奥三河と接する天竜区の佐久間地区に集中する傾向がある。

また、江戸時代に始まった農村歌舞伎は、神仏への奉納芸能として広域に広がった。近代には、余暇を楽しむ芸能として大流行した。市内では、北区引佐町に伝わる横尾歌舞伎(県無形民俗)が代表例である。



図3-7 信仰関連遺産と民俗芸能 (1:家形土器、2:浜名惣社神明宮、3:滝沢のシシウチ神事、4:鹿形埴輪、5:西浦の田楽、6:寺野のひよんどり、7:遠州大念仏、8:川合花の舞、9:横尾歌舞伎)

8 地域の成り立ちを伝える遺跡群

本市の原始古代の遺跡は、東海地方を代表するような豊富な内容を持つものが多く、遺構や遺物は地域の成り立ちを物語る。

蜷塚遺跡（中区、国史跡）は、縄文時代後晩期（約4,000～3,000年前）の環状貝塚を伴う集落遺跡である。水辺に近い周囲の同時代集落では貝塚が形成されていないことを考えると、貝塚をもつ本遺跡は、縄文時代の人々にとって特別な場所として認識されていた可能性が考えられる。縄文時代の社会統合の仕組みが読み取れる重要遺跡である。

弥生時代の祭器である銅鐸は、西日本に分布するが、本市はその分布域の東限にあたる。本市では発掘調査によって埋納状態が確認されている事例もある（滝峯才四郎谷遺跡、北区、県史跡）。後期の銅鐸は、その形態から近畿式と三遠式に分けられるが、本市での出土品は両者が入り混じる。宗教的世界観と青銅器の生産と流通の実態を伝える資料群は、発掘調査で豊富に確認できる同時代の集落遺跡の情報とともに、日本列島内で芽生えはじめた政治的統合の成立過程を伝えている。

市内には20基の前方後円（方）墳がある。最大例は5世紀中頃に築かれた光明山古墳（天竜区、国史跡）であり、街道を臨む立地から、サトとヤマを結ぶ内陸交通の掌握者の墓と想定されている。また、三角縁神獣鏡が出土した赤門上古墳（浜北区、県史跡）や鉄製の甲冑を副葬した千人塚古墳（東区）など、本市域では、時代を通じてヤマト王権との関係が保たれていることもうかがえる。また、巨岩祭祀跡である滑伊神社境内遺跡（北区、県史跡）や渡来人の墳墓とみられる二本ヶ谷積石塚群（浜北区、県史跡）など、多様性に富んだ遺跡に恵まれている。人物や動物を象った埴輪も多く、豪族の儀式の様子を具体的に知ることができる。

伊場遺跡群は中区東伊場二丁目とその周辺にある遺跡群の総称で、古代遠江国敷智郡の郡家所在地に比定されている。200点を超える木簡をはじめ墨書土器といった文字資料（県有形）が大量に出土しており、地方行政の実態を知ることができる。この他、市内には飛鳥時代や奈良時代の遺跡も数多く、古代の行政区分の成り立ちや、その後の推移が高精度で復元可能である。



図3-8 主要な遺跡（1:蜷塚遺跡、2:銅鐸、3:光明山古墳（三次元陰影図）、4:伊場遺跡公園、5:伊場遺跡出土木簡）

9 徳川家康と武田信玄が対峙した攻防の舞台

浜松を代表する戦国武将といえ、徳川家康が挙げられる。桶狭間の戦いで以降、三河で独立して力をつけた家康は、元龜元年（1570年）には引間城を拡張して浜松城と改名し、天正14年（1586年）に駿府に移るまでの17年間を浜松城主として過ごした。浜松時代の家康の初期の脅威は武田信玄であった。両者最大の衝突は、元龜3年（1572年）に起こった三方ヶ原の戦いである。武田軍は、駿河と信濃から侵攻し、浜松城に迫った。野戦に誘い出した信玄の術中にはまり、家康は惨敗、浜松城に逃げ帰る。戦いの直後に信玄の健康状態が急激に悪化、翌年の行軍中に亡くなったことで、一連の軍事行動が収束するが、その後、徳川氏と武田氏の衝突は天正10年（1582年）まで続く。この間、二俣城と鳥羽山城（国史跡）を舞台にした攻防戦も行われた。

本市域に勢力を持った奥山、天野、松井、大沢、井伊、浜名氏などの国人領主（国衆）をはじめ、各地の土豪は徳川と武田の勢力争いに翻弄され、滅亡の道を辿るものもあった。一方、徳川と関係を深めた勢力は命脈を保ち、江戸時代には、譜代大名（井伊氏）のほか、旗本（大沢氏、近藤氏）や有力庄屋（中村氏、万斛鈴木氏、田代氏）などに引き継がれる。

市内には、家康にまつわる伝承も多い。遠州大念仏（市無形民俗）は、その真偽はさておき、徳川と武田が対峙した三方ヶ原の戦いを契機に広がったとの言い伝えがある。家康の長男信康は、織田信長に嫌疑をかけられ、二俣城で自刃した。同じ時期に殺害された正室築山殿の終焉地は、太刀洗の池（中区）として伝わっている。家康の次男秀康は、中村家屋敷（西区）で誕生した。この屋敷地には17世紀後半に中村家住宅（国重文）が建てられた。家康の有力家臣であった井伊氏は、のちに彦根藩主に成長する。井伊氏の本貫地であった北区井伊谷には、井伊氏にまつわる文化財が豊富に伝わっている。また、近世以降が、家康と関わった土豪ゆかりの文化財として、旧田代家住宅（天竜区、国登有形）や万斛鈴木家屋敷（東区）なども知られている。



図3-9 徳川家康関連図 (1:家康像、2:犀ヶ崖、3:二俣城跡、4:中村家住宅、5:伝井伊共保出生井、6:三方ヶ原合戦関係図)

10 古刹と寺宝

本市に残る古刹は、古代に創建が遡る真言宗寺院、中世に創建された臨済宗及び曹洞宗寺院、近世に創建された黄檗宗寺院にまとまりがみられ、それぞれ特徴ある建造物や寺宝をもつ。

平安時代から鎌倉時代にかけては、市内に真言宗寺院が盛んに造営された。本市にある真言宗寺院は、奈良時代に創建されたと伝わることも多く、創建後に密教寺院化した経緯がうかがえる。とくに、浜名湖北岸域では山林寺院を前身にしている真言宗寺院が複数知られている。浜名湖を臨む山林の景観は、比叡山山系から琵琶湖を臨む風景と対比されるような宗教的空間であったとみてよいだろう。大福寺（北区）は、平安時代の創建と伝わる山林寺院、幡教寺を、摩訶耶寺（北区）は、山林寺院、進達寺及び真萱寺をそれぞれ前身にもつ。両寺には、国重文の絵画、彫刻、工芸品、古文書が伝わっている。この他、長楽寺（北区）や岩水寺（浜北区）にも古い彫刻が伝わる。

中世には方広寺（臨済宗方広寺派、北区）、龍潭寺（臨済宗妙心寺派、北区）、普濟寺（曹洞宗、前身は隨縁寺、中区）、栄林寺（曹洞宗、天竜区）など、多くの禅宗寺院が創建された。方広寺は、南北朝期の動乱に伴い当地に勢力を伸ばした南朝勢力（後醍醐天皇皇子、無文元選）が関わり、県内最古の木造建築、七尊菩薩堂（国重文、15世紀初頭）が境内に残る。

近世には、北区細江町を中心に領地をもった旗本、近藤貞用の招きに応じた明の僧、独湛によって寛文4年（1664年）黄檗宗の宝林寺（北区）が開かれた。独湛は、当地に黄檗宗の文化を伝え、頂相や自画像をはじめとした多くの絵画を残した。現在、市内には、大雄寺（中区）などを加え、黄檗宗寺院が9か寺が知られ、本市域は黄檗文化が根付いた地としての特徴が見出せる。宝林寺の境内には、初期黄檗の伽藍配置の名残を伝える仏殿・方丈2棟（国重文）が残るほか、木造釈迦如来坐像及び両脇侍像3軀、木造達磨大師座像・伝武帝倚像2軀、木造二十四善神立像24軀（いずれも県有形）が仏殿に安置されている。



図3-10 建造物と彫刻

(1:宝林寺仏殿、2:方広寺七尊菩薩堂、3:宝林寺二十四善神像、4:摩訶耶寺千手観音立像、5:摩訶耶寺阿弥陀如来像)

11 豊富な名勝庭園

浜名湖北岸域の北区には国や県の名勝に指定されている庭園が集中する。本市にある庭園の中で最も古い様相を伝えるものは摩訶耶寺庭園（県名勝）である。この庭園は、浄土庭園の影響を受けたもので、鎌倉時代の手法を踏襲している。同じく浄土庭園として、室町時代の作庭とされる大福寺庭園（県名勝）がある。庭園は西方浄土を意識して西向きに築かれている。

浄土庭園と同じく庭園背後を意識した作庭思想は、江戸時代に作庭された名勝庭園にも多く認められる。長楽寺庭園（県名勝）は、かつての本堂があったとされる北山（光岩）を借景に望む。大小100本を超えるドウダンツツジの庭として知られている。龍潭寺庭園（国名勝）は、庭園東側にある庫裏の書院から西に望むと、庇護者である井伊氏の菩提を弔う霊屋があり、その背後には井伊氏墓所が並んでいる。同寺がある井伊谷は、戦国時代までこの地をおさめた井伊氏の本貫地であり、菩提寺である龍潭寺は江戸時代に彦根藩主をつとめた井伊氏から多くの支援を受けた。同じく領主と深く関係する庭園としては、実相寺庭園（県名勝）がある。この庭園は、同寺の創建に関わった旗本、近藤貞用の墓所を遥拝する位置関係にある。

なお、本市では発掘調査された戦国時代の庭園として、鳥羽山城跡（天竜区、国史跡）の庭園遺構も知られる。



図3-11 市内所在の庭園

(1: 龍潭寺庭園、2: 鳥羽山城跡庭園遺構、3: 大福寺庭園、4: 実相寺庭園、5: 長楽寺庭園、6: 摩訶耶寺庭園)

12 都市「浜松」の成り立ちとゆくえ

浜松市は近世城下町を基盤に発達した。明治32年(1899年)の町制施行、明治44年(1911年)の市制施行を経て、地方都市としての歩みをはじめめる。時々の行政区分を超え、経済圏は現在の市域と重なる部分大きい。明治時代には、天竜川や気田川流域の森林を利用した製紙工場(旧王子製紙製品倉庫、天竜区、県有形)が操業されたほか、鉄道院の工場の誘致が行われた。三方原台地においても、明治時代から茶園(百里園)の造営が始められ、開発の端緒が開かれた。民間では織布工場や染色が発展した。例えば馬込川(まごめがわ)のものとの河川敷など、当時の都市郊外に規模の大きな工場が立地し、やがて大規模な繊維工場が林立するようになった。

戦前の浜松には、明治40年(1907年)の陸軍第六十七連隊の創設以降、軍都としての性格もある。歩兵連隊は大正14年(1925年)に廃止されたが、昭和3年(1928年)には、高射砲第一連隊がその跡地に移駐した。浜松まつりの景気づけに進軍ラップが採用されているのもその名残りである。また、戦前に活躍した本市出身の建築家として中村與資平がいる。與資平が設計した建造物として、旧浜松銀行協会、旧遠州銀行本店(いずれも中区、市有形)が中心市街地に残る。

戦後の復興を経て、浜松はその都市の有り様を大きく変えていったが、地名や区割り、建造物、そして人々の営みなどを通じ、中世から連綿と続く都市の系譜を随所に見出すことができる。

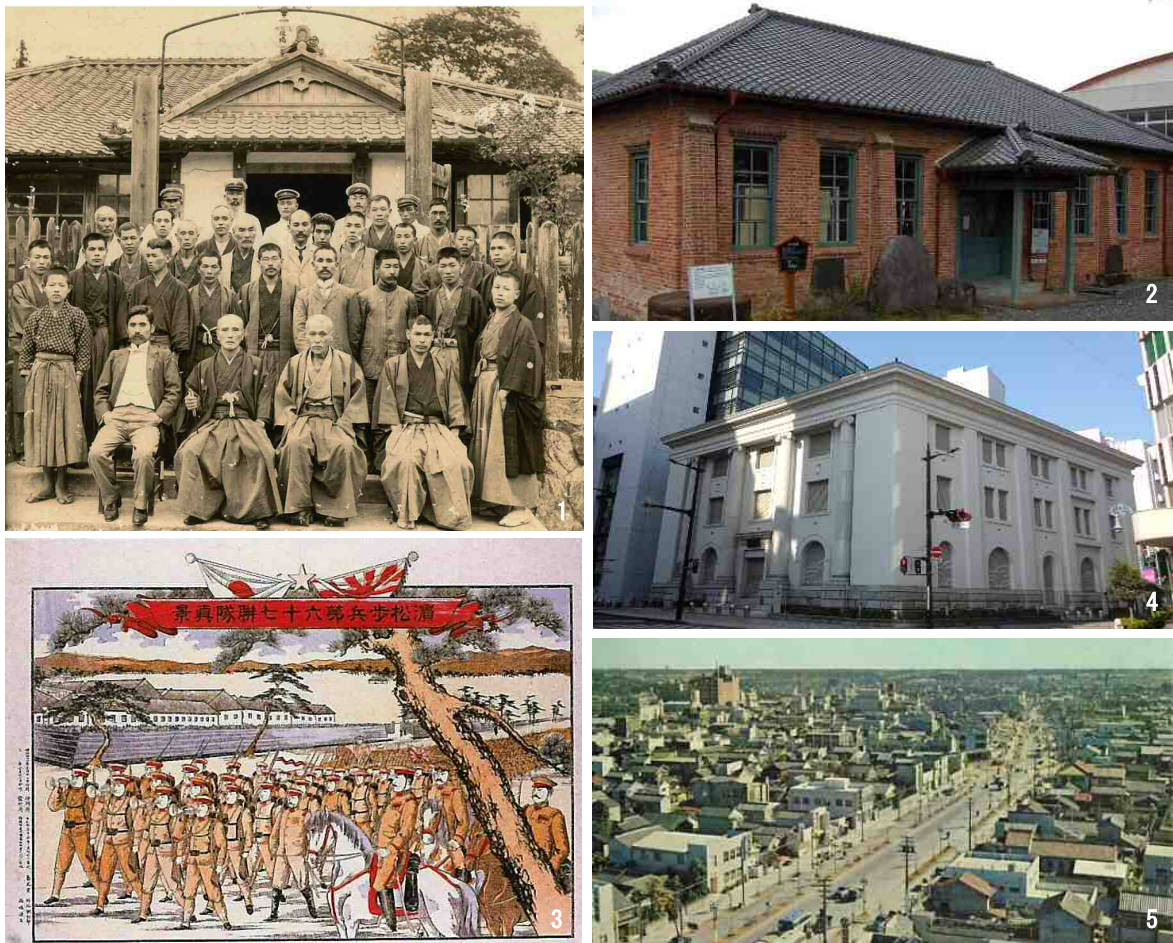


図3-12 都市「浜松」の歩みを示す画像

(1:浜松町町制最終時、2:旧王子製紙製品倉庫、3:歩兵第六十七連隊案内、4:旧遠州銀行本店、5:昭和30年代の市街地)